



巻頭言

“人類福祉”に由来する シンボルマーク

●
鶴田 禎二 Teiji TSURUTA

東京大学名誉教授, 日本化学会元会長



会員の皆さんは、日本化学会のシンボルマークが“人類福祉”を象徴する図柄に由来することをご存じでしょうか？ このシンボルマークのルーツを求めて歴史をさかのぼると、第26回 IUPAC Congress (Tokyo, 1977) (以下 IUPAC77 と略称) の統一テーマ“人類の福祉のための化学”の理念に到達します。なぜ、この図柄が選ばれたのか？ 経緯や意味づけを知る人は少なくなりました。しかし今日、“人類福祉”の追求はますます重みを増して私どもに迫ります。私は皆さんに、このマークの意味づけについて思いを巡らし、ご自分の仕事を原点に還って考えていただきたく、あえて、40年昔のことをここに書きとどめて巻頭言としました。

もともと欧州主体の IUPAC では、遥かに遠い Far East の日本は Congress 開催地の候補にはなっていませんでした。大変なハードルではありましたが、諸先達のたゆまぬご努力のお蔭で、ついに 1973 年、第 26 回 Congress を東京に招致することが決定されました。日本学術会議が主催、日本化学会、日本薬学会、日本農芸化学会の 3 学会共催、日本化学会は実質的な計画・執行の推進者としての役割を担当、準備委員会 (のちに組織委員会) の委員長には赤松秀雄東大教授が就任されました。委員会 (鶴田もその 1 員) 第一番の仕事は、Congress における重点テーマの決定でした。その当時、社会の眼は、環境汚染の元凶として化学に厳しく、さらにはオイルショックが世界を震撼させ、人類はエネルギーの難問題に直面していました。「これらの難問の解決に化学がどのように寄与できるかを論議し、未来の化学を先取りする場を創ること」が Congress の目的として集約され、これを、「人類の福祉のための化学」と命名し、5つの主題から成る合同シンポジウムの形で、IUPAC77 の主体とすることが決まりました。1974 年 5 月 21 日のことです。

この日以来、委員会の仕事は、IUPAC77 の趣旨を全世界にアピールするため、共感を呼ぶ内容を盛り込んだサーキュラーを作成し、世界に PR することでした。この意味で Congress の性格を象徴するシンボルマークのデザインは非常に大切な仕事であったのです。1975 年 5 月 17 日、かねて作成を依頼していた千葉大・赤穴^{あかな ひろし}宏教授 (意匠工学) から提出された数種の作品から、最適の図柄が“人類福祉”の象徴として選ばれました。この図柄には、東洋で初めて開かれる Congress にふさわしく、日本古来の郷土人形こけしを人類の像になぞらえ、“連帯して福祉をもたらそう”との願いが込められています。

日本化学会設立 100 周年 (1978) の節目に制定されたシンボルマークのことは、本誌 1977 年 11 月号に公告されています。公募に応じた作品の中から候補作を絞り込んだが、採択されるに至らず、結局 IUPAC77 のシンボルマークに CSJ を嵌め込んだ図柄が制定されることになりました。これは、日本化学会の理念の象徴として最適の選択であり、東洋の寄与が重みを増しつつある今日、ますます深い意義を秘めている“比類なき作品”であると私は解釈しています (史実の詳細調査に協力された日本化学会フェロー田島慶三氏並びに事務局担当の諸氏に感謝いたします)。